

筆谷先生を偲んで

野村博

筆谷先生が忽然と他界されて、早くも八か月の月日が経った。

先生は自分に忠実で、感じたり考えたりしたことは直ちに口にし行動に移す、という直情径行型の人であった。それだけに、絶えず周囲の者に必ず何らかの影響を及ぼさないではない大きな存在であった。先生が亡くなられて八か月、今さらながら、先生の存在の大きさを感ずるとともに、先生の言行のわずかなずかを懐かしく回想している昨今である。

先生の人と学問については、昨年七月に出版の冊子『筆谷稔先生追悼集』で多くの方々により述べられているし、また、今年五月の一回忌に御霊前に捧げるべく刊行予定の『筆谷稔博士追悼論文集』においても語られるはずであるから、私がここで駄弁を弄することは止めよう。ただ、先生の人柄について有縁の人々が異口同音に語っていることは、先生が

きわめて強烈な個性の持ち主で、豪放で繊細、せっかちで行動力が抜群、忙中に静を求めながら「仕事第一」に、生命を燃焼しつくして死を迎えた研究的で同時に政治的な人間である、ということに要約できるのではなからうか。

確かに先生は、私の見るところ、「いらち」(苟立つ人)であった。だからこそ、片時も手許から書物を離すことななく、折りさえあれば原稿用紙にボールペンを走らせる、という学道をまっしぐらに進むことができたのであろう。私などは、小・中学校時代に、「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず、未だ覚めず池塘春草の夢、階前の梧葉已に秋声」という朱熹の漢詩を耳にタコができるほど聞かされたが、生来の愚鈍で怠惰、「学び問う」ことばかりで、その成果(?)もまとまらないまま、いたずらに馬齢を重ねている。恥ずかしい限りである。

袖触れ合うも多生の縁、筆谷先生の「いらち」にあやかっ
て、駕馬にむちうたなければと苛立っている今日このごろで
ある。

幽冥境を異にする筆谷先生の御冥福をお祈りするととも
に、先生からの叱咤激励と加護を念じつつ、ペンをおく。

——一九八三年一月二十八日——

(本学教授)